

女性医師の窓

女医の葛藤

桜ヶ丘病院 精神科 平田 和美

最近、学会や講演会に参加して、何か違和感を感じるのです。その違和感が何か、先日開催された北陸精神神経学会に出席し、最後列の席に座った時にひらめきました。出席者が約60~70名のところ、女医はほんのわずか7~8人程度なのです。そのうち大学関係で出席が必須とされている女医、発表者の女医を除くと3~4人程度ではありませんか。しかも、女医は左右どちらかの端の列か端から2列目、又は最後列か最後列から2列目にしか着席していません。探さないと女医を発見できないのです。これでは、何か場違いのところに迷い込んでしまったような違和感を感じて当然と思いました。

この出席率に関する、男女差はどこから来るのでしょうか。これまで、特に真面目に考察していませんでしたが、“女性医師の窓”のために、考察してみましょう。いえいえ、そう簡単に文章にしてしまったら、男性医師から非難の声を浴びてしまうかもしれません。いえいえ、もうここまで書いてしまったのだから、書いてしまいませんか、と葛藤しながら原稿締切が今日、。もう書くしかありません。。

では、まずこの学会が日曜日の午後という時間帯にも関わらず、果敢に出席した女医は、如何なる人物かに着目すると、①独身 ②高齢者 ③好奇心旺盛な既婚者 この3つに分類されます。

① 独身者に関しては、大学時代の授業風景から考えるに、圧倒的に真面目に授業を受けるのは女子ではなかったかと思います。このことから、真面目女子は、結婚しない限り真面目女子で居続けられる可能性があり、ひいては学会出席意欲を阻害する因子がない限り、せっかくの日曜日を勉学に励むことができるのではないのでしょうか。

② 高齢者に関しては、まだ残念ながら高齢者になっていないので推測の域を出ませんが、もし私が高齢者になったら、と考えると、子育ても終え、夫も仕事でいなくなったりした時に、やはり時代に取り残されないように、少しでも知識を得たいと考えるかな、と、しかし、高齢者になった時に、その意欲を持ち続けられるかという全く自信はありません。むしろ、こたつに入ってうたた寝しながら、若いころの楽しい夢でも見ているのではないのでしょうか。高齢者の御出席に関しては、本当に尊敬しますし、医師の見習うべき姿ではないかと思っています。

③ 好奇心旺盛な既婚者に関しては、日曜日の午後に子供や夫をほったらかして、自らの好奇心、勉学のためとはいえ学会に出席することの弊害も考慮し、少数にならざるを得ないと考えました。そしてあえて、“好奇心旺盛な”と付けてみました。「家庭と仕事とどっちをとるか」という議論におよぶ壮大な考察になってしまいそうなので、ごまかしたいところですが、つまりは“男性は仕事をとり、女性は家庭をとる”その結果として、この出席率の違いが生じているのではないのでしょうか。

私が、感じる違和感。それは愚妻であることへの後ろめたさ、そして子供にとって母のこの行動が正しいのか、間違っているのか、そんな葛藤からくるものなのかもしれません。女医が、自ら誇れる女医であるためには、様々な葛藤と、犠牲となる家族があり、男性が考える以上に辛い職業なのかもしれません。どうか女医に少しでも温かい目を向けていただければ幸いです。